

令和5年度 第3回神戸市就学・教育支援委員会

議事要旨

- 1 開催日時 令和5年12月14日(木) 15時～17時
- 2 開催場所 神戸市総合教育センター701号室
- 3 出席委員 石倉委員長、中尾委員、小林委員、上原委員(オンライン)、高田委員、中西委員、河崎委員(オンライン)、関口委員、西田委員
オブザーバー 大前校長(オンライン)、楠原校長、島崎園長
- 4 議事
(1)「第1回視覚障害教育部会報告」(資料1)
(事務局より資料1について説明)

●委員長

- ・事務局より第1回視覚障害教育部会について報告があったが、質問やご意見をいただきたい。
- ・肢体不自由や重度障害の子どもたちは、体の動きが中心になり、見えにくさについては見逃されてしまう。
- ・見えの問題に関しては、見え方をチェックして工夫しながら教材の提供をやっているが、それ以上に何ができるのか。肢体不自由部門の教員はどのように指導しているのか。

●委員

- ・見え方や障害種別に応じて対応するため、まずは課題を提示しながら、視覚障害があるかどうか、ある場合はその程度をまずは把握する。視力はあるが大きなものしか見えないのであれば、拡大の定義の仕方になり、重複障害で視覚も失われている場合は、他の感覚に頼ることになる。

●委員

- ・視覚障害について、どこまで見えているのかを判断するのはなかなか難しい。
- ・視覚障害との重複障害の場合、知的障害である場合は知的障害に、肢体不自由であれば体の動きに注意がいきがちになる。

○事務局

- ・特別支援学校の肢体不自由部門で、人工呼吸器を使っている子どもが視線入力装置を使うことで、認知や見る力があると特定できるケースがある。
- ・ある肢体不自由の子どもが、視線入力装置を使って、眼球が随意的に動くパソコン上の画面が割れたり、追視すると弾けたりするゲームを体験したが、自分ができたということを実感しているようで、表情が微笑ましくなった。その様子を見学していた保護者も感激していた。
- ・神戸市では、視線入力装置は多く導入されているが、しっかりとICTを活用していくこ

とが大事だと感じている。

●委員

- ・教員の専門性や教育能力を担保していくことが課題である。
- ・視覚障害のある方は、同じ障害のある方がどのように社会で生きていくのかということを知り、自身の最終的なゴールを見つめる。保護者を含め、つながりやネットワークを確保していく必要がある。

●委員

- ・神戸市が、視覚障害の子どもたちに対して、どうしていきたいのかはつきり分からない。
- ・地域校に通う視覚障害のある児童生徒は、認知面が高い子どもが多く、見えていなくても活動ができる子どもが多い。
- ・5つの特別支援学校において、視覚障害と認知の問題もある肢体不自由の重度の子どもたちは何人いるのかについて、調査しているのか。(事務局：視覚障害に関しては調査していない。)
- ・肢体不自由部門がある特別支援学校において、盲学校で実施している教育が担保できるのかを考えて、視覚障害教育部会を進めるべきだと考える。また、視覚視力の問題と視覚認知の問題は分けて考えるべきである。
- ・弱視の特別支援学級の設置については、子どもにあった指導ができる能力のある教員が何人いるのかについても、並行して考える必要がある。
- ・盲学校であれば初期から点字の指導ができる。地域校へ進学する場合、幼稚園で点字を教えるのか、それが可能なのか、点字指導についても目途を立ておく必要がある。

○事務局

- ・就学前と就学後について連携していくことが大事であると思っている。
- ・大阪府下にある地域校の視察を踏まえて、全職員が点字を含めた専門性を理解しながら進めていると感じた。大阪府では、視覚特別支援学校が少なくとも月に一度は指導に入って、助言をしている。
- ・個々に応じた教育課程を学びながら、視覚障害教育特有の点字や歩行訓練を含めて、子どもの力を伸ばしていくことがとても大事な課題であると感じている。
- ・保護者との意見交換で、地域校に魅力はあるが、専門性をしっかり確保してほしいとのご意見をいただいた。視覚障害と他の障害を併せ有する子どもたちへの指導については、東京都立久我山青光学園への視察や、肢体不自由の特別支援学校において、視覚障害に対してどのように取り組んでいるのか把握し、何ができるのか考えていく必要があると思っている。

●委員

- ・市立盲学校に通う児童生徒は重複障害が多いのか。

○事務局

- ・今年度については、小学部に在籍する児童全員が単一障害で、中学部や高等部も単一障害の生徒が多い。県立視覚特別支援学校の小学部は、重複障害の児童が若干名いると聞いている。

る。

●委員

- ・単一障害なのか重複障害なのか、また障害の程度にもよると思う。
- ・効率的に進めるのであれば、学びの場の選択を与えるのではなく、一つの選択肢に集中させるほうが良いと思うが、選択肢を広げようという考え方で取り組んでいるのか。

○事務局

- ・地域の中で同じ年代の子どもと、ともに学ぶことがとても大切である。地域で学ぶことを選択する場合は、視覚障害教育の専門性を確保して対応できるようにしていきたいと思っている。

●委員

- ・視覚障害とその他の障害を併せ有する子どもが、どの学びの場を選択するのかについては、家庭によると思う。保護者の思い（地域、送迎がある等）によって、選択する学びの場が決まることが多いと感じる。
- ・将来像を考えた際にピアサポートが大事だと思うが、ピアの集まりをどう培っていくのかも大切である。
- ・障害の程度もあるが、年齢によって対応すべき発達課題など、子どもの発達状況に応じて提供していくことはなかなか難しい。

●委員

- ・地域で様々な人と接して学ぶことも大切であるし、専門的教育も大切であるため、両方の柱をどう確立していくのが重要だと思う。
- ・特別支援学校で専門的教育を受けることと、地域校で友人関係や社会性を育てることのどちらかを選ぶことは難しい。今の教育課程では難しいと思うが、柔軟性のある体制を構築していく必要があると思う。
- ・教員の育成についても計画的に対応していく必要がある。視覚障害の専門性と、指導できる教育の専門性の両方が必要になる。見通しを立てて、両方の専門性のある教員を育てていくことが課題になっていくと思う。

●委員

- ・盲学校の役割の一つとして、中途障害の子どもたちへの再教育がある。
- ・視覚障害のある方は色々な場面で活躍しており、何か一つ目標を持つことができれば世界で活躍できる可能性がある。そのような視点も視野に入れながら、人生や目標を後押しできるカリキュラムや、教育の質を保証することが一番大事だと思う。
- ・小学校、中学校での学びだけでなく、高等学校や大学など、義務教育課程を修了したあとのことも考える必要がある。

○事務局

- ・保護者との意見交換でも、地域校で専門性のある環境で学べるのであれば、そこで学んでみたいと思うが、高等学校への進学については、盲学校の高等部に進学し、同じ障害のある

仲間と学ぶことになると思うという意見もあった。

- ・部会員からは、技術の進歩によって ICT を活用すれば、しっかり大学で学習や研究ができるという話があった。

- ・子どもにとって今の時点で最も適切な学びの場はどこかを柔軟に考え、義務教育課程を修了した後のロードマップを描いて取り組む必要があると思う。

●委員

- ・視覚障害教育部会では、児童生徒数が減っている現状において、インクルーシブな環境をどのように整えていくのか、また垂水区にある県立視覚特別支援学校と協働して取り組む方法はないか、という方向で議論している。

- ・現状の問題点を踏まえて、最終的にはインクルーシブな社会の実現に向けて、今よりも一歩前進するためにはどうしたらよいのか、引き続き議論を進めていきたいと思っている。

●オブザーバー

- ・神戸市には、県立と市立の視覚障害の特別支援学校がある。子どもたちが自分らしく生きていくために、適切な学びの場を実現できるよう何か一歩進めばよいと思った。